

清末民初の在地知識人における文明と郷土

佐藤 仁 史

はじめに

本稿は、中国社会文化学会二〇〇五年大会シンポジウムの論題として与えられた、前近代東アジアにおける優越規範文化の伝播とそれに対応した自己認識の発生および自己再構築の過程が有する特徴の一端を、西洋を発祥とする規範文化の清末以降における受容過程を素材として検討するものである。優越規範文化としての西洋文明の中国への伝播過程やその特質については、いくつかの示唆に富む研究が蓄積されてきている。アジアが近代以降どのように認識されるようになったのかを論じた山室信一氏の名著では、ヨーロッパが自己認識するために生み出した概念や認識枠組みによってアジアが認識されるようになり、そのことが東アジア近代のあり方を規定したことが緻密に解明されている。文明、人種、文化、民族という基軸概念の思想連鎖によって、東アジア世界が、日本を結節環として類同化・平準化しつつ、その対応の仕方の差異によって固有化したという(一)。

西洋文明の受容過程を近代中国に即して検討した諸研究に

おいては、人種や進化の概念の伝播とその広がりの方に関心が集中してきたように思われる。万国公法の受容とその背後にある文明観を分析した佐藤慎一氏は、社会進化論の受容と儒教的世界像の転換の過程における両者の不連続性を指摘している。「列国並列」の状態から「大同」の世界に向かつていくことが文明の目的であると康有為が、みなしたのに対して、梁啓超は社会進化論に立脚し、生存競争の結果生みだされる状態として文明を捉えた対照に社会進化論と儒教的世界像との接合をめぐる苦闘が表れている(二)。梁啓超の文明論を分析した石川禎浩氏は、西洋中心の視点に立つ人種や進化という言説の共通コードが、剽竊と翻案を重ねて歪みを内包しつつ清末に受容された過程を分析し、かかる歪みの共有化が東アジアに相互対話可能な「文明圏」の成立の土台となったと主張している(三)。

歪みを内包した「言説の共通コード」は、活字メディアの発展とともに、地理的な広がりに加えて知識人への階層的な広がりをみせたことにも注意する必要がある。例えば、人種に関する坂元ひろ子氏の仕事では、近代中国の民族主義が人

種退化に對する恐怖や人種差別意識と分かち難く形成されてきたこと、優生思想が社会進化論・退化論との関連で受容され、「恋愛神聖」というデイスコースも「優種」である健全な国民の養成と不可分の關係にあったことが明晰に示されている(4)。かかる進化や人種概念が広がった背景は、活字メディアの担い手である新たな知識人層や新式学校の教員・学生などの青年知識人層といった、清末以来の新たな階層の登場と密接な關係があろう。

本稿では、清末以降における優越規範文化の地域や社会階層への伝播と、それに対応した自己意識の形成という問題、すなわち、「言説の共通コード」となった文明や人種などの概念やそれらと密接に關係する社会進化論などが在地知識人の中でどのように捉えられていたのか、かかる文明觀を受け入れることによって郷土とはどのような存在であり、どうあるべきであると自己認識されるようになったのかという問題を、江南地方の県や市鎮レベルの地域社会に即して考察する。もちろん、知識人の最末端に位置する在地知識人の文明觀には、雑多で相矛盾する考えが混入しており、中には荒唐無稽な主張が多く見られることは警告を要さない。しかしながら、そこに内包される矛盾や歪み自体が、地方自治制の実施や近代学校教育の導入など地域社会の様々な課題に直面する中で彼らによって切実に考えられた結果生まれたものであり、その自己意識の特質を考察する上で好個の対象であるように思われる。

具体的な分析に際して本稿で着目するのは次の三点であ

る。第一は、在地知識人と出版との關係である。在地知識人の手になる数多くの出版物のうち、本稿では彼らが共有する秩序意識が一定程度反映されていたと思われる、①郷鎮志、②郷土教育のテキストである郷土志、③地方新聞、という三種の史料をとりあげる(5)。第二は、かかる史料を残した在地知識人のあり方の違いである。本稿で中心的に取り上げる①と②を残した知識人と、③でとりあげる一九二〇年代の知識人との間には科挙文化や近代教育との距離に違いがあり、そのことが彼らの郷土像に影響を与えたように思われる。第三は、郷土とはどうあるべきかという課題ともに浮上してきた教育と民間文化のとりえ方に関する問題である。社会教育や啓蒙運動における歌謡や演劇の利用という発想は清末において既に大都市の知識人にみられたが(6)、通俗教育や識字教育の推進に伴い、在地社会においても民間文化をどのように捉えるかという問題に在地知識人は直面することとなった。本稿では、在地知識人の世代差を念頭に置きつつ、文明觀や郷土意識との関連で民間文化の捉えられ方をみていく。

以下、第一章では郷鎮志に記述される郷土像にそって、第二章では郷土志にみられる文明觀や郷土像に即して、第三章では新南社社員が推進した平民教育にみられる民間文化觀を素材として、在地知識人において文明や郷土がどのように捉えられていたのかを分析する。なお、本稿の内容は既発表の拙稿に依拠するものであり、検討する論点や引用する史料の多くが重複するが、シンポジウムで与えられた論題を検討するためにそれらを再構成したものであることをあらかじめ

断つておきたい(7)。

一 郷土の都市化・産業化と風俗

1 清末民国期の郷鎮志

先ず、郷鎮志に表れる文明化と郷土意識についてみる。郷志、鎮志、里志、村志など様々な呼称を有する郷鎮志は特に江南地方で集中的に編纂・刊行されたことに特徴があり、乾隆期から光緒期にかけて刊行の全盛期を迎えた(8)。清代江南の郷鎮志の序にみられる郷土意識を分析した森正夫氏は、「郷脚」に相当する市鎮空間の領域性の認識、近隣市鎮における郷鎮志編纂への対抗意識、県志―府志―省志―一統志と連なる官撰地方志末端における位置付けへの希求などの要因から、独自の領域性を伴う自己同定意識が郷鎮志の編纂者に形成されていたことを見出している(9)。

森氏が指摘する意識は清末民国期の郷鎮志においても概ね妥当であると思われるが、清末以降には新たな展開も見られるようになった。例えば、『錢門塘郷志』序において、「現在、教育普及の説も既に耳に慣れている。制定された小学校の歴史・地理の課程においては、本郷の山川や人物を教学の素材とする。行軍における地図、行政における風俗、生業における物産など、『地方志は』また政治によつて重視されているところである。したがって、方志は旧学ではあるものの、新知を啓発することができる。類書に近いものであり、本末を総合してみることができ、実用に益することがないと言えないのである」と述べられているように、郷鎮志をはじめと

する地方志の編纂を郷土志や教育の関連で捉えるものも現れている(10)。

たとえ刊行に至らなかったとしても、清末新政の諸政策の地域社会における導入状況やそれがもたらした地域意識の高揚をいかに地方志に反映させるかという議論が起ったことが地方新聞よりうかがい知ることができる。例えば、嘉定県西門郷では清末に『西門郷志』の編纂が企図されたが、推進者の一人が「地利」と「民徳」という言葉で表現しているように、地方志編纂の意義は地域発展のために地域の潜在力を引き出し、下からの秩序構築を支える規範意識を発揮することに置かれていた(11)。これらに加えて、本稿で着目するのは、上海近郊農村の郷鎮志に特に強く表れる、都市化や産業化という座標軸において郷土がいかに意識され、叙述されるようになったのかという側面である。

2 都市化・産業化と郷土

都市化の進展が上海近郊農村にもたらした影響については、郷鎮志を綿密に分析した高橋孝助氏の一連の研究がある。それらでは、租界を中心とする上海都心部と陸路によつて接続され変容が進んだ農村部と、水路の有機的なネットワークで繋がれた農村部との対比が示されている(12)。ここでは、高橋氏の成果に拠りながら、都市化の進展やその影響が郷鎮志の編纂者にどのように受け止められ、どのような郷土認識の違いを生み出したのかについて概観する。

先ず、都市化が著しく進展した地域の事例として宝山県

南部の江湾鎮を取り上げよう。「宝山県志」の編纂が開始されたのを受け、江湾鎮では県志編纂に供するために『江湾里志』が編纂され、一九二四年に刊行された。総纂には県屈指の有力者で、後に『宝山県志』の総纂も務めた錢鎰（一八七五—一九二二）が就任した。清末民国初の江湾鎮における都市化の進展について、錢鎰は次のように端的に述べている（13）。

思うに江湾鎮は上海・宝山兩県の交通の要衝である。昔は三里の市場に過ぎなかったが、現在では鎮以南において馬路が日増しに増加して一面に広がっている。商埠の発展によつて上海と一体となつて区域に境界がなく、その繁盛は全県随一である。（以上の点が）物質面における文明の進歩や政教・風俗上での変遷において、他の市郷と比べて「江湾鎮が有する」特殊な点である。

ここでは、江南地方の至る所に存在する「三里の市場」のひとつに過ぎなかった江湾鎮が、鎮南部に顕著である陸路の整備に伴つて交通の要衝としての地位が高まり、上海都心部と「聯為一氣、無区域之可分」という状態となつたことによつて、県内随一の繁盛を謳歌することに至つたことが明快に述べられている。注目すべきが、かかる都市化の進展が近隣とは異なる「物質面における文明の進歩」を江湾鎮にもたらしたことに對する肯定の視点である。ここに、都市化が體現する「文明化」を尺度として郷土を評価・同定するという意識を見出すことができよう（もちろん、『江湾里志』においては都市化の進展がもたらす緒現象の全てに對して肯定的

であつたわけではなく、「物質上の文明の進歩」と併記されている「政教・風俗上での変遷」については別の意識を生み出してゐた。詳細は次節参照）。

『江湾里志』において肯定的に述べられていた「文明の進歩」は、道路を隔てて租界に隣接してゐた上海法華郷においては愛國意識と直接結びついた郷土意識を高揚させることとなつた。『江湾里志』とはほぼ同時期の一九二二年に刊行された『法華郷志』の序文において、「外國人は郷中に馬路を日々増設せんとしていたので、利を計る者は甘んじて悪者の手先になつてゐるために、（中國の）主権が路權とともに失われてしまつた。郷の範圍は日々小さくなり、郷が（租界と）交渉すべき事柄は日々繁雜になつてゐる。郷民は日増しにその自由を失つてゐるにもかかわらず、愚かにも自覚がない」と嘆かれてゐるように（14）、租界からの越界路の拡張によつて中國の主権が奪われてしまつてゐる現状と、主権の喪失に對する郷民の意識の低さに對する憂慮が表明されてゐる。そして、「路權」とともに主権が侵害された経緯を郷志に記すことの意義について、「外國人がほしいままに越界路を建設して主権を侵害してゐることは火を見るより明らかである。このことを地方志に書き記すのは、愛郷心によつて國を愛することを可能にするためである。王（が編纂した）『法華郷志』の重要性をどのように考えるだろうか。私（朱實）は郷に居を構へてゐるが見聞は極めて少ない。ただ國際主権と地方自治の關係についてどうしても郷民に告げなければならぬので、（本書の意義の）大略を記して序とする次

第である」と述べ、愛郷心の喚起によって愛国心を発揚する使命が宣言されている。この記述からは、租界という存在を介して西洋文明が伝播する近代上海が有する二面性を看取することができよう。

次に都市化や産業化が進展しなかった地域の郷鎮志においてどのように郷土が捉えられていたのかをみてみる。高橋氏によって水郷としての面貌を留めた農村として取り上げられた宝山県月浦郷の『月浦里志』では、「吾が郷は海沿いの僻地にあり」という表現が頻出している。上海の近郊に位置していたとはいえ、陸路や鉄道の整備が遅れたことにより、一九三〇年代に至っても都市化・産業化から取り残されたままであった。『月浦里志』の風俗の項では、民国期における当該地の状況が次のように描写されている(15)。

わが郷は辺鄙な海沿いに位置しており、交通は極めて不便である。普通の工芸を除けば、工場は創設されておらず、多くの女工は糸紡ぎに頼って生計をたてている。機械製の綿糸が流行して以来、土布の価格はまた下落し、利益も次第に少なくなっている。加えて、これ(土布生産)に従事しているものは依然として旧法を墨守して改良を知らない。民国一〇年、県人の張鑑衡が北弄本宅に裕民棉織廠を創設した。動力織機を三十あまり備え、専らタオルを織り、上海へ運送して販売している。

ここでは、月浦郷の産業化を阻害している要因として旧法を墨守して改良を知らない郷民の意識の遅れが指摘され、新たな技術を用いた工業の導入や土布改良の必要性が説かれ

ている。目指されるべき近代化と目下それを達成していない郷土という対比は、上海近郊農村において広く見られる構図であった。例えば、奉贤県の郷土教科書である『奉贤郷土誌』では、「わが県は辺鄙な沿海部に位置しており、交通は不便である。商工業は発展していないが、農産物は多い」と述べられ、豊富な農産物や水産物を有しながらも商工業の未発達によって地域の潜在力を産業化において発揮できていないことへの危惧が示されている点に同様の構図を見出すことができる(16)。

右のように、都市化を急速に成し遂げつつあった市鎮と都市化や産業化が遅々として進まなかった農村という対照的な地域の郷鎮志にみられる郷土意識に通底するのは、上海の都市化や産業化という基準をもとに郷土の文明化を序列化するという認識であり、対照的評価は同一の価値観の表裏であったと指摘することができよう。

3 風俗の変容

『江湾里志』では「物質上の文明の進歩」に対する肯定が表明されているのと同時に、都市化の進展がもたらした「風俗上での変遷」、すなわち、従来の質朴な風俗が華美に流れていることへの憂慮も示されている。以下では郷鎮志の風俗志にみられる郷土像について考えてみたい。

ところで、社会変動期における風俗の変容が士大夫の強い関心を集めたことは、明末の風俗観に関する研究が明らかにしているところである。ここでは、尊—卑、長—少、貴—賤

といった価値観の顛倒と風俗維持への郷紳層の責任、風俗の良否という波動的な歴史認識と個人の倫理的主体性といった側面が指摘されている(17)。清末以降の郷鎮志の風俗志の記述にも明末士大夫の風俗観が有していた倫理的主体性の性格が濃厚に表れているが、これに加えて、清末以降には新たな身体観・尚武観が登場することによって、西洋文明と対置される「野蛮」とその改造の使命が意識されるようになっていく(18)。では、郷鎮志の記載から具体的な内容をみてみる。

『法華郷志』では風俗の変遷を次のように述べる(19)。

法華の人物は質朴で裝飾をしなかった。士人は氣節を貴び、農民は耕織に勤め、商人は本業に尽くして分を守っていた。(『法華は』)これまで純朴な村里であり、家にあるときも必ず身なりを整えていた。……咸豐庚申の戦乱の後、礼俗は簡略に向かつて、服裝は奢侈淫靡が習いとなり、かつての実直さに及ばない。

ここで注目すべき内容は、清末以来服裝が華美になり、奢侈な行動が増え、もともと郷民が有していた質朴の氣風が失われてしまったとする常套句であり、これは地方志の風俗志において異口同音に述べられている。『江湾里志』においても、地価の高騰により巨額の富を突然手にいれたものが情に任せて浪費をするような「輕薄で奢侈な習慣」が日増しに顯著となったことが、かえって「他鎮の殷厚(裕福さ)に及ばない」情況に至らしめたことへの憂慮が述べられている(20)。「物質上の文明の進歩」への賞賛とは対照的な評価であるといえよう。

風俗の退廃が進行したという認識は、陸路の整備によって都市圏に取り込まれつつあった地域ばかりでなく、相対的に取り残された地域にもみられた。『月浦郷の』風俗はもともつつましいものであった。近年次第に奢侈の風に染まるようになったが、(郷民には)その自覚がない」という『月浦郷志』の批判からも(21)、質朴から奢侈へという風俗の変化が月浦郷にもおいても意識されていたことが見て取れよう。

しかしながら、このように風俗を描写した郷鎮志の編者が目指したのは、かつて有していた質朴に単に回歸することではなかった。というのも、郷民たちは「奢侈の風」という外界の影響に染まっていたものの、総じて言えば外界の刺激を受けることが少なく、「保守の性身(性質・身体)」を留めて地方公益を顧みない彼らの習性を、『月浦郷志』の作者は嘆いているからである。郷民のあるべき姿とはどのように考えられていたのかをみてみよう(22)。

我が郷の農民で、田を耕して草をとり、收穫を刈り取るのに苦しまない者はいない。しかし、ありきたりのことを踏襲して改良することを知らない。怠惰なものは安閑が習いとなり、生計が日増しに逼迫しても、雑草の伸び放題に任せている。財産が豊かな者は衣食を租に頼り、労働に従事しない。華美に着飾った少年や市井の無賴は酒や賭博、鴉片に溺れ、日に日に墮落した道に慣れてしまふ。わずかでも自愛ということを知っているものでも、ただ茶や酒を飲んで閑談するばかりで、正業は廃れてしまっている。実業を振興し学問を研究するものは、

少数に過ぎない。志のある男児はこれに勉めなければならぬ。

ここでは、郷民や郷土をあるべき姿に改良・改造していくことを直截提起する文章で風俗が描写されている。すなわち、旧法を墨守して改良を知らないこと、鴉片の吸引や茶酒に耽り、正業をおろそかにすることといった郷民の習性との対比において、農業の改良や実業の振興、それらの労働に適合した身体の規律や習性を備えた郷民を養成することの必要性が訴えられている。文明化や国家化という観点から身体を捉える観念は清末の都市部に出現したが⁽²³⁾、民国期にはいると近郊農村においても及ぶようになっていたのである。このことは、清代には科学科第を名譽として文学に偏重したためひ弱な体質であった郷民の中から、「最近世の中の移り変わりがめまぐるしく、ようやく尚武を重んじるようになって。男子の間には望んで陸軍で学んだり、入隊したりするものがある。女子はみな天足を尊び、体育を重視するものもあるわれた」という変化に対する肯定からも見て取れよう。

二 郷土志における文明と郷土

1 郷土志とその作者

本章では、郷土志の編纂背景や内容を手がかりとして、近代中国において文明や郷土がどのように捉えられていたのかという問題の一端を考えてみたい。

郷土志とは、清末の近代教育制度の導入に伴い、初等教育における教材として編纂された郷土教科書の総称である。京

師編書局監督黃紹箕が『郷土志例目』を著し、その頒布を朝廷に上奏したのを受けて、一九〇五年に学部が編纂を命じたことによつて全土で編纂が広がった。民国に入つても、一四年に教育部が各県に通達して郷土志の編纂を促している⁽²⁴⁾。地域によつて編纂経緯が異なるため、郷土志の種類や現存する数、所蔵状況についての全貌は明らかではない。不完全な統計に拠れば、清末に四五〇種あまりが、清末民国期全体で一〇〇〇種あまりが全国で編纂されたという⁽²⁵⁾。

郷土志は、その体裁や内容が地方志を参照して編纂されたため、地方志に準じるもの、或いは類するものとして扱われ、専ら方志学の分野において取り上げられてきた⁽²⁶⁾。また、史料として用いられたとしても傍証程度に留まつてきたのは、郷土志が児童を対象とした初等教育の教材という性質から、暗記を容易にするため内容が極めて簡潔であることに起因すると思われる。

ところが、近年では郷土志が登場した背景やその記述内容に踏み込んだ論考が現れている。これらが提起する論点のうち、本稿の検討内容と関連する二点を示しておく。第一点は、郷土志が有する地域的差異から浮かび上がる地域性の特徴である。総じて言えば、清末に郷土志が多く編纂された地域（例えば、山東六九種、四川五二種、陝西四二種、遼寧四一種）では、『郷土志例目』を遵守して地方志の体裁に即した郷土志が多い⁽²⁷⁾。これに比して、清末の江蘇や浙江では多くが編纂されたとは決していえないものの、『錫金郷土歴史』『錫金郷土地理』『常昭郷土歴史教科書』『常昭郷土地

理教科書』のように、教科書としての特徴をより鮮明にしたものが占める割合が大きい。これは当該地域における学校教育の現場における教学上の需要を反映したものである(28)。例えば、『呉江教育状況』からは教育現場において実際に郷土志が使用されていたことが確認でき(29)、『川沙郷土志』が一九一八年に第三版まで版を重ねていることも郷土志が実際に使用されていたことの証左のひとつである(30)。郷土志の地域的特徴について明示的な議論を行っているのが広東の郷土志に関する程美宝氏の専論である。氏によれば、漢族内部の様々なエスニック集団(「族」)間の利害衝突や正統性の争奪という広東社会の状況を反映し、広東の郷土志ではかかる集団をどのように位置付けるかが、優勝劣敗の思想との関連で問題視されたという(31)。これに対して、愛郷心の涵養を通じた愛国心の発揚が異口同音に強調されている点に江蘇・浙江の郷土志の特徴を見出すことができるように思われる。しかしながら、次節以降で具体的に検討するように、編纂時期によって文明へのスタンスや愛国の捉え方に相違が見られる。

第二点は、清末以降における近代地理学の導入と普及によつて、国家や民族、郷土がどのように想像されるようになったのかという問題である。例えば、吉澤誠一郎氏は清末の地図をとりあげ、国土の「瓜分」に対する危機意識が急激に高まる中で、国土の一体性や実体性という発想を喚起する契機として地図が用いられたことを指摘している(32)。郷土志を含む郷土地理教材の編纂も、児童に郷土地理の知識を身

につけさせ、愛郷心を涵養することを通して民族意識を高揚させることを目指したものであった。附言すれば、郷土が全体としての「中国」と連続するという立場から郷土を叙述することは、郷土の特定の側面のみを抽出するという問題をも内包するものであった。

それでは、江南における郷土志の編纂者がどのような人物であったのかについて簡略に纏めておく。その特徴は、①行政職や議員といった公職を務めたこと、②学校を創設したり学校教員を務めたりするなど教育界を立脚点にしていたこと、③県志や郷鎮志の編纂に参与していたこと、の三点に集約される。①については、『川沙郷土志』の編者陸培亮(一八八八—一九六九)が編纂当時県視学を務めており、『陳行郷土志』の編者の一人である秦錫田(一八六一—一九四〇)が江蘇諮議局議員や上海県参事會議員を歴任した人物であることが挙げられる(33)。②については、『崇明郷土志略』の著者曾元愷や『陳行郷土志』の著者孔祥百が教員を、『奉贤郷土誌』の著者朱醒華と胡家驥が県教育会のメンバーを務め、『錫金郷土歴史』『錫金郷土地理』の著者馮鴻鑒(一八七二—一九六一)が竟志女子中学や模範小学などを創立したことなどを例示することができる(34)。③については、『陳行郷土志』の秦錫田や『川沙郷土志』の陸培亮がそれぞれ県志編纂において中心的役割を担ったことを指摘できる。また、地方志と郷土志との関係は、郷土志の材料の多くが地方志に依拠したというだけにはとどまらなかった。『双林鎮志』や『章練小志』のように、郷土志に触発されて編纂

された郷鎮志もあったことは、両者の関係や編纂者の郷土像を考える上で示唆に富む事実である(35)。以下、二節にわたる郷土志にあらわれる文明観と郷土像について具体的に検討する。

2 清末——陳羅孫『通州地理教科書』『通州歴史教科書』

本節において、陳羅孫『通州地理教科書』『通州歴史教科書』を取り上げるのは、張謇の主導のもと推進された通州における近代学校教育の成果は輝かしい模範として中国全土に知られており、両書には、清末に目指された近代化の特徴が端的に表れていると思われるからである(36)。作者である陳羅孫の名前は南通の地方志等に発見することはできず、その経歴は不明である。張謇による実業振興や近代学校教育の普及を賞賛する教科書の内容から判断すると、張謇支持派かそれに近い立場にあったエリートであった可能性が濃厚である。通州(民国以降は南通県)は清末民国期を通して四種類もの郷土志が編纂された希有の地域であるが、『通州』郷土歴史地理教科書『南通郷土志』『南通県郷土志』という他のバージョンの郷土志からは、張謇を賛美する内容をほとんど見いだすことはできない(37)。この対照も陳羅孫の立場を間接的に示す証左であると思われる。

両書の構成は、地理上編三六課、下編二八課、歴史四〇課の全一〇四課からなっており、初等小学堂の第一学年から第三学年の教学に供するものとされた。第四学年では江蘇省の地理・歴史に進むことが想定されていた。先ず、『通州地

理教科書』の内容が有する特徴について二点に分けてみてみる。第一は、直観教授という方法である。前半部が、位置、疆域、沿革から始まり具体的な地名や地形にそって学習内容が進展していく構成を採っているのは、地方志の体裁を模倣したことに加えて、「現地の道里、形勢、人物、名跡に即して、直観の觀念を引き起こす」ことを目指したことを反映したものであるという(38)。これは郷土の事物が「二草一木」に至るまで児童が平素親しんでいる愛すべき存在であり、直観的に理解できることを前提にしたものであろう。かかる郷土像は『郷土志例目』や他の郷土志にも広く見いだすことができる(39)。

第二点は、郷土改良の必要性の提唱である。地理教科書の最後の六課は実業に関する内容が占め、通州の農業、商業、工業、林業、漁業、塩業における現状と改良すべき点とが簡潔に提示されている(40)。郷土の改良が目指すところについては、凡例に「歴史は人類の進化を主義となす。本編もこの観点に基づく。教学時には前後の時代と比較して、児童に天演の競争の概略を知らしめなければならない」と明示されているように、「天演の競争」を勝ち抜く郷土を作り上げることにあった(41)。したがって、郷土の歴史も、郷土が「天演の競争」に必然的に巻き込まれていく過程と、そこで勝ち抜く資質を郷土の内部に見出すという、通俗的な社会進化論の発想に基づく歴史観を端的に反映した視点から解釈された。『通州歴史教科書』全四〇課は太古紀、中古紀、近古紀、近世紀という発展段階に分類され、それぞれ陸地の発見から

文明の發生まで、春秋時代から明末まで、明末から太平天国まで、南京条約以降から清末新政までの歴史が割りあてられている。このうち、「人類の進化」という観点から歴史に意義を見出すという点が特に強調されているのが、中古紀において八課もの分量が割かれている「倭寇」に関する部分である。興味深いのが、冒頭部分である二二課の割注において、倭寇を「今の日本蝦夷人である」としている点である(42)。歴史的事実に照らし合わせると荒唐無稽にすぎないが、日本の「劣種」アイヌとの対抗関係を滲ませている点に、人間にある「優勝劣敗」をどのように教えようとしたのかという実態をうかがい知ることができよう(43)。そして、倭寇による被害と通州社会の反応について五課にわたって述べた上で、次のように総括している(44)。

我が通州はしばしば倭寇の患に遭った。暫くの間恐怖に包まれたが、禍が過ぎ去ってからこれを考えると、人智を増進させないわけでもなかった。歴史上では固より外族の侵略があり、「それが」文明の媒介となることがあった。我が通州における倭寇もまた然りである。今「倭寇がもたらした影響を」三つの要点にまとめると次の通りである。

種族思想

以前は様々な民族が雜居しており、いわゆる種族思想はなかった。倭寇の襲来以後、人民ははじめて外人が殘虐であることを知り、そこから種族の感情がうまれたのである。

公共觀念 倭寇の禍を経て、人民は愛群、團結排外を若干知るようになった。

尚武精神 咸豐・同治期の粵匪がもたらした危機に際して、通州人は兵器を鑄造して来るべき決戦に備えた。

倭寇の襲来という對外危機が、種族の感情に基づく團結や郷土に対する「公共觀念」「愛群」感情、「尚武精神」といった、清末に要請されていた資質を通州人にもたらしたという構図で記述されている点が特徴的である。中古紀の段階において外庄に対する抵抗の素養や意識が通州人に備わっていたという趣旨を突出させることは近代部分の読み方を準備するものであった。第三六課、新通州、は言う(45)。

揚子江流域はすでにイギリス人の勢力圏に入ってしまった。我が通州は、上流は江蘇北部に、下流は上海や福建に通じる要路に位置しており、外国人が必ず爭覇する地である。イギリス人は経済や政策を壟斷し、我々の命運を押さえつけている。もし(かかる状況を)打開しなければ、我が郷土の人々は一〇年もたたない間に必ず窮して餓死してしまうであろう。にもかかわらず、我が通州人は愚かにも餌をかいて熟睡していたのである。張季直(張謇)先生が立ち上がり、愛國は愛郷から始めるべきであると高らかに宣言して以来、(通州に)夜明けが訪れた。

続いて、通州における実業や教育推進の輝かしい成果を述べ、最近の「發達時代」において通州が新世界に生まれ変

わつたと賛美して締めくくられている。

以上検討した『通州地理教科書』『通州歴史教科書』の構成や内容からは次のような特徴を指摘できるように思われる。編者にとって歴史とは郷土が「天演の競争」に必然的に巻き込まれていく過程であり、そこで勝ち抜くための文明化の資質、とりわけ公共心や「愛群」感情といった全体に寄与する素質が郷土の内部に見いだされていた。郷土志の意義は通州人にもともと備わっていた資質を発揮させて愛郷心を涵養し、ひいては愛国精神を発揚させることにあつたのである。

3 一九二〇年代前半——陳頌平・秦錫田等

『陳行郷土志』、曾元愷『崇明郷土志略』

次に、一九二〇年代前半の郷土志として、郷土教育の意義について類似した主張をした『崇明郷土志略』と上海県陳行郷の『陳行郷土志』を取り上げる⁴⁶⁾。前者は元来崇明県の乙種商業学校の教学に供するために準備されたものであり、後者は郷レベルで編纂された数少ない郷土志であるように、両書は他の郷土志と異なる若干特殊な編纂背景を有していた。両書の編纂意図に共通してみられるのが、海外の学問や知識を導入して愛国を論じる新知識人に対する対抗意識である。『崇明郷土志略』の序において施祖恒は「今の歴史家や地理学者は古今東西のことを身振り手振りで形容しながら述べるが、そもそも日頃知っておくべき郷土のことを質問しても睜目して答えることができない。ワシントンやナポレオン

の人となりを知っていても祖先の名前を答えることができないようなものである」という批判を述べ、郷土から遊離した知識のあり方に疑問を呈している⁴⁷⁾。別の人物が寄せた序文に「思うに小学校の児童は必ずしもすべてが高遠な人材ではない。大多数は郷土で生活を営む平凡な国民に過ぎない。もし適切な郷土の知識を教授せず、いたずらに域外のことを論じて高尚さを求めても、幼年の児童といえども必ずしも会得することができない」とあるように、実用的な郷土の知識の教授による国民の養成という方法が、「高尚な議論」への対抗において主張されている⁴⁸⁾。

同様の主張は『陳行郷土志』にも見いだすことができる。編者の一人である孔祥百は愛郷と愛国のあり方について次のように主張している⁴⁹⁾。

愛国を空しく談じる志士は各国の書に通曉し一世を風靡しているが、郷土の掌故を一二質問されると睜目して答えることができない。……郷土を識らないでどうして郷土を愛することができようか。郷土を愛することなくしてどうして国を愛することができようか。

前節でみた『通州歴史教科書』において新思想とはそのまま郷土教育に注入されるべき知識として捉えられていたことと対照的に、新文化運動の影響のもと海外の学問や知識を導入して愛国を論じる新知識人への対抗意識が直截に述べられており、郷土の実際に即す自分たちの方法こそが真の愛国なのであるという自負が表れているように。

ところで、多くの郷土志の場合、その作者が地域社会にお

いてどのような活動を行い、いかなる秩序意識をもつていたのかを追跡することは困難だが、『陳行郷土志』の作者はいくつかの著作を残しており、比較的詳細な分析が可能である。以下では、彼らの文明観や郷土像の内実をみていく。主編者である秦錫田と胡祖徳（一八六〇—一九三九）は、前者が長い生員生活を経て學人に科第した人物であり、後者は生涯を生員として過ごした人物であったように、科學文化の末端から登場し、清末以降に地域の近代化を目指すようになった平凡な知識人であった。両者とも學堂、學校の創設に尽力した人物であったが、秦錫田は教育普及の目的を次のように述べている（50）。

思うに二〇世紀の世界では、工業力や商業力によつて戦うが、実はそれらは學の力で戦うことに他ならない。人と人との戦い、家と家との戦い、国と国との戦い、種と種との戦い、これらはすべて學のあるものが生存し、學のないものは滅亡し、學が盛んであれば強者となり、學が盛れば弱者となる。優勝劣敗は固より進化的法則であつて自然の趨勢である。……小学より中学・大学へと、一校から数十数百校へと拡大し積み上げ、學校が林立し人材が輩出されれば、主權を保ち、外力に抵抗し、實業を導び、生計を豊かにできる。

「人と人、家と家、国と国、種と種」という修身齊家治國平天下の各位相において優勝劣敗が繰り広げられるのが二〇世紀の世界であるとする認識からは、儒教思想に立脚しつつ、通俗的社会進化論を解釈したハイブリッドな文明観の存

在を指摘することができよう。かかる文明認識に基づいて、郷土の建設から國家危機を克服する方法が優勝劣敗の世界を生存する具體的な方法として提示されているのである。

次に、郷土の「合群」の鍵となる教育の推進において問題視されるようになった民間文化に対する認識についてみてみたい。『陳行郷土志』の風俗に対する記載は文明の名のもとに迷信を断罪するという構図で記述されており、これは清末以来の「改良風俗」の系譜に連なるものである（51）。作者の一人である胡祖徳は、『陳行郷土志』の編纂と同時に、在地において歌謡や俗語などを精力的に収集して『滬諺』『滬諺外編』の二書を編纂し、識字教育の素材として活用しようとした。『上海風俗』編纂の中心的役割を担い、自身の文集を残した秦錫田と対照的に、胡祖徳は殆ど自分の文章を残さなかったが、生員として一生の殆どを鎮に在住し、平素より民間文化に接していたことが『滬諺』に結実したと思われる。秦錫田の弟錫圭（一八六四—一九二一）は『滬諺』に序文を寄せ、その意義を郷土志との関連において次のように述べている（52）。

仮に今日の小学校の数を十倍にしたとしても、なおその収容可能な人数の不足が憂慮される。いわんや小学校で教える対象は僅かに十歳前後の少年のみであつて、すでに農業や商工業に従事して學齡期を越えてしまったものをどうして切り捨ててしまうことができようか。そこで『滬諺』が編纂されたのである。用いられる言葉は、身近なものから外へと広げていき、俗語（諧語）を

用いることで、読者の興味を引き出している。これらは平素聞きなれているものなので、その文字を認識させるのが容易である。また、詳細な注釈を施し、「読者に」一を聞いて十を知らしめるようにするのに道徳をよりどころにしている。……ところで、国とは郷が積み重なったものである。小学校において郷土志の授業を行うことを提議するのは、児童の愛郷心に訴えることによって愛国を達成せんとするからである。郷土の人間がその郷土の首（郷首）で暗誦することで（郷土のことに）関心を持たしめ、その愛郷心が油然而して湧き上がるのを以つて、自然とわが国の大国民を養成せんとするのが本書の趣旨である。

識字教育を推進していく現実的な方法として俗語に着目した以外に、古典の教養と俗語との間にある共通性を利用することによって郷民の「徳性」を涵養することを目指した点からは、彼らの民間文化への関心があくまでも教化の視点に基づいたものであったことを読み取ることができよう。

三 一九二〇年代の地方新聞にみる文明と民間文化

1 新南社と新聞

『陳行郷土志』や『滬諺』が刊行された一九二〇年代初頭になると、江南の在地社会においても新知識人層が登場し、新文化運動や社会主義思想などの影響のもと郷土建設を推進した。本章ではかかる新知識人層の事例として新南社をとりあげ、科挙文化から登場した知識人たちとの相違点に着目し

ながら、彼らが発行した新聞の内容に即してその文明観や郷土像をみていく。

柳亜子を中心とする新南社の活動の起源は清末の南社に遡及する。南社は民族主義思想の鼓舞に果たした役割に夙に高い評価が与えられ、現在の評価も概ねこの線に沿っていると言える（53）。かかる評価に対し、朱小田氏は南社の活動が有する「内向呈現」「外向呈現」という二面性を指摘している。前者は「雅集」という酒宴を通じた伝統的士大夫の繋がりが有する側面を示すものであり、後者は、南社が新聞界を活動領域とし、それを通じた啓蒙運動に積極的に関与したという特徴を示すものであるという（54）。近代中国における新聞メディアの発展を促進した「報章文体」の創始者の一人である梁啓超に拠れば、報章文体とは通俗的な文章表現によって「中等人」に対する効果をねらうものであった（55）。辛亥革命前後において南社社員が参与した新聞は『民立報』『太平洋報』『天鐸報』など枚挙に暇がない。これらの意義は、民族主義思想の鼓舞や同盟会との密接な関係、反袁世凱世論の砦としての側面などから解釈されてきたが（56）、「中等人」に対する活字メディアの影響力の広がりと共に活動領域を広げたという背景も指摘できよう。

南社の活動が有する「外向呈現」の側面において夙に注目されてきたのは、「下等社会」に対する働きかけ、すなわち、「下等社会」が共有する文化を利用して彼らに対する啓蒙・教化を進めていこうとする試みである。その方法のひとつに戯劇改良運動があり、陳去病らが創刊した『二十世紀大

舞台」は輝かしき成果の一つとしてしばしば論及されてきた(57)。「下等社会」を啓蒙・覚醒する手段としての民間文化という発想は、一九二〇年代の新南社にも継承され、二〇年代に入ると、民間文化の捉え方自体が問題視されるようになる(58)。

南社の活動が実質的に停頓した一九一七年以降、柳亜子は呉江県黎里鎮に活動の拠点を移し、新文化運動を本格的に消化して、口語体による創作活動や平民教育運動、社会主義や孫文の思想の宣伝などを展開することとなったが、活動の母体となったのが新南社であった。新南社の活動が有する顕著な特徴として市鎮における活発な出版活動があげられる。呉江県およびその周辺地域において発行された新聞のうち、ある程度まとまった分量が現存しているものの一覧が表一である。中でも影響力が大きかった『新周莊』『新黎里』『新盛澤』の三紙の発行者や主要な執筆者は柳亜子と相互に強い影響を持った。次に彼らの履歴をみてみよう。

『新黎里』の主編は柳亜子が務めたが、柳亜子を輔け、副主編を務めたのが呉江県立第四高等小学校校長の毛嘯岑(一九〇〇—一九七六)である(59)。新盛澤報社は徐蓮軒(一八九二—一九六二)とその従弟徐蔚南(一九〇〇—一九五二)によって運営された。徐蓮軒は龍門師範卒業後、紹興第五中学、上海博文女子中学などで教鞭を執り、徐蔚南は震旦学院に学び、官費での日本留学を経た後に復旦実践中学や浙江大学において教鞭を執った(60)。「新盛澤」において多くの記事を執筆した汪光祖(？—一九二八)は医師で

表一 呉江及び周辺の市鎮で発行された新聞(現存するもの)

新聞名	発行地	発刊時期	発行者と主要執筆者	備考
新周莊	周莊鎮 (呉県)	一九二二年 一月二〇日	朱燾新、唐鑑、陳鼎人、陶惟地	前身は一九二一年九月六日創刊の『鎮江声』。二四年四月一日停刊。
蘆墟	蘆墟鎮	一九二二年 一月二五日	許侯康	一〇号発行後停刊
盛澤	盛澤鎮	一九二二年 一月一八日	徐因時、呂君豪	九五期は『盛澤』と合同で『盛報』を発行。一九二七年一月二三日停刊
新黎里	黎里鎮	一九二三年 四月一日	柳亜子、毛嘯岑	一九二六年二月一日停刊
新盛澤	盛澤鎮	一九二三年 七月二六日	徐蓮軒、徐蔚南、汪光祖、徐蔚南	一九二七年一月二二日停刊
盛澤	盛澤鎮	一九二三年 一月一〇日	丁趾祥、程良綱、沈復鏡	盛澤鎮と王江涇鎮の有志が合同発行。一九二六年一月一日停刊
勸進	松陵鎮	一九二三年 一月一〇日	呉江中學勸進會	
新平望	平望鎮	一九二五年 八月一日	黃茂宮、陸劍飛	
新同里	同里鎮	一九二五年 一月一〇日	同里教育界	
宣報	盛澤鎮	一九二六年 一月一日	丁趾祥、徐小石	

註：拙稿「地方新聞が描く地域社会、描かない地域社会」より転載。右線は新南社社員を示す。『新盛澤』は呉江市档案館蔵、その他は全て上海図書館蔵である。

あったが、盛澤平民教育促進会を結成し、識字運動や通俗演講団の組織などを主導した(61)。彼らの生年からも容易に判断できるように、いずれも新式の学校教育から誕生し、教員や医師など専門的職業に従事する新たな知識人層であることが一目瞭然であろう。

さて、新南社社員による記事の内容は多岐にわたるが、発行直後は労働問題、恋愛や結婚に関する問題が論説の多くを占めており(62)、「勞工神聖」や「恋愛神聖」に関する主張からは優生思想の影響をうかがい知ることができる。これらの新聞の論調は、後に三民思想や国民党左派としての主張の宣伝に重点が置かれていくようになる。本稿ではこれらの問題すべてにわたって触れることができないので、次節では彼らの文明観や郷土像が端的に表れている民間文化をめぐる議論を検討する。

2 新南社社員の民間文化観——『新盛澤』の場合

『新黎里』や『新盛澤』などの発行は一九二〇年代の地方自治制の再開と重なっており、自治を支える主体に関する議論が活発に行われた。清末の自治については、蘇州商會に結集した紳商層の独自の領域性について注目されてきたが(63)、二〇年代には商會や市民公社、教育會、平民教育促進會など自治を推進する主体が多様になり、自治職に就いた有力紳士を指彈する論評が多く見られるようになる(64)。「新盛澤」の創刊号において、徐蔚南が「改革に着手する第一歩は、各業種から職業を持った人(商人自身が望ましい)」を若干推挙して市民市社を組織し、市政の革新に努力することから始まる。また、識字運動を發起し、平民教育を提唱しなければならぬ」と述べているように、自治や社会改革の新たな主体として想定されたのは、商人層が組織する市民公社であった(65)。「民治」を実現する団体として期待された市民

公社のうち、黎里では毛嘯岑を發起人の一人として、商會や教育會といった諸団体の協力のもと黎里市民公社が結成された。黎里市民公社社長殷佩六(二八八一—一九四二)は今後の推進すべき事業として八項目を挙げ、このうち市鎮建設に関する項目以外に、通俗演講團の組織、通俗教育館の設置、閱報社の充実、公共娛樂施設の設置、と通俗教育に重点が置かれていることは市民公社が志向する「民治」の在り方の一端を示すものである(66)。もちろん、「一般平民」は自治の主体の一翼として想定されてはいたものの、その覚醒をもたらずのは「智識階級」の指導によるという構図が存在していた。この点について、平民教育の実態とともにみてみよう。

盛澤平民教育促進會は汪光祖によって結成され、下部組織として商誦函授部、識字教育部、通俗演講部が設置された(67)。商誦函授部は絲綢業に従事する職工に必要な知識を教授することを目的とし、後に商誦學校に改組された。後二者は識字能力がないか、あっても劣っている平民層を対象とするものであった。したがって、郷民が平素慣れ親しんでいる文化を教育の手段として積極的に利用していこうとする発想がしばしば主張されている。次にその特徴を端的に示す記事をみてみよう(68)。

私は、郷鎮の茶館やそれ以外の多くの人が集う場所もすべて実地で通俗演講を行う絶好の場所であると思う。演講の前に、その地方の社会状況や風俗、習慣を調査する必要がある。また、「通俗演講の際に」選ぶ素材や演講

の口調は通俗的でなければならぬ。つまり、社会の人々の興味に合わせなければならないのである。

実際の通俗演講のために作られたと思われる現地の素材や口調を用いた歌謡が『新盛澤』には掲載されている。泗州調という小調を用いた「国民団結歌」や五更調という小調に三民主義や反帝國主義の宣伝に関する歌詞をのせた歌が実際の事例の一部である(69)。また、公衆衛生を説く「改良通俗小調夏衛生歌」という歌の内容は次のようなものであった(70)。

公衆呀 衛生 大家要留心 夏天時候易生病 有病無意興 暖呀 快快講衛生 暖呀 暖暖呀 個人要留神
街道呀 清淨 伝染病勿生 伝染病生真害人 一人伝二人 暖呀 大家不安寧 暖呀 暖暖呀 要死許多人
河溝呀 潔淨 吃水就碧清 吃到肚裏不生病 大家要留心 暖呀 人人有精神 暖呀 暖暖呀 疫癘就不生
蚊子呀 蒼蠅 实在真害人 飯館小攤要留心 吃物不乾淨 暖呀 吃了要生病 暖呀 暖暖呀 刻刻要留心
公衆呀 衛生 夏天頂要緊 瘟疫發生勿迷信 快快請醫生 暖呀 医生好医病 暖呀 暖暖呀 性命活得成
これにも蘇州一帯で特に人氣を誇つた「知心客」という呉歌を模倣したものであると注記されており、そこに極めて通俗的な衛生の知識をのせている。これらはいくまでも啓蒙・教化の手段として民俗を捉える見方であり、清末の啓蒙運動と同様の方向性を共有していたといえよう。
しかしながら、平民教育の推進者の間でも相反する民間文

化観が存在していた。手段として民間文化という見方に対して、革命思想の影響を受け政治的文化的な主体としての「民衆」が主張される中で、民間文化を肯定的に評価する議論も登場した。『新盛澤』の発行人の一人である徐蓮軒は、民衆文学が発展し、従来の貴族文学を一掃することが「優勝劣敗」であり、不可避の趨勢であるとした上で、民衆文学とは次のようなものであると主張する(71)。

現在「民衆文学」が必要とされているからには必ず真正の「民衆文学」を捜し求めなければならない。もし依然として知識階級が作つた文学であるならば、「真正さ」と隔たりがあることを免れない。現在の知識階級が作っている民衆に関する文章は、依然として真正の「民衆文学」ではない。なぜなら知識階級には往々にして一種の偏見、自私、卑劣な行爲があり、その文章も決して民衆生活の本当の情緒を表現することは出来ないからである。……従つて、真正なる「民衆文学」は決して知識階級が表現できるものではなく、かならず、農、工、商業などに従事する人たちが、自ら体験した環境から感じ取つたものの中から表現されなければならない。「それらは」或いは凄惨なものかもしれないし、楽しいものかもしれない。或いは愉快なものかもしれないし、或いは憂慮や苦痛に満ちたものかもしれない。或いは悔悟や警戒の感情かもしれない。要するに、彼らが平素随意に口ずさむ、水田歌や挿秧歌、竹枝詞などこそが真正なる「民衆文学」なのである。

かかる主張は、清末以来みられた手段としての民間文化や改良の対象としての民間文化という見方とは一線を画するものである。

相反する民間文化観は『新盛澤』における廟会をめぐる議論にも表れている。震澤鎮東にある双楊村では「双楊会」と称される廟会が一〇年に一度開催され、それは、震澤鎮や梅堰鎮、盛澤鎮を二週間にわたって出巡するという極めて盛大なものであった。一九二四年に双楊村の紳士や双楊廟と昭靈侯廟の住持によって開催の準備が進められたことに對して、汪光祖は「匪類の介入と扇動を招く」として双楊会を指揮している。震澤市議會副議長と農會會長も会の中止に向けて運動しており、治安の観点に立つたかかる廟会観は地方指導層に共有されたものであった⁽⁷²⁾。また、汪光祖は、廟会全般についても野蛮であるとして文明の對極に位置付けている⁽⁷³⁾。

これに對して、廟会が有する文化的な積極性を強く肯定する意見が現れる。徐蔚南は廟会において行われる賽会について次のように述べている⁽⁷⁴⁾。

最近、賽会に反對し、賽会は迷信の一種であつて科学とは背馳し時宜に適つていないと考える一知半解の輩がよくいる。通俗的な賽会觀もただ迷信の一点に基づいてゐる。私が正したいのはまさにここにある。ただし、賽会についての私見を述べる前にあらかじめ表明しておきたいのは、私が迷信を弁護するわけではないということである。私は、賽会は迷信以外に芸術上での重大な意義が

あると考える。芸術は知識階級のみが創りだせるものでは決してなく、芸術の鑑賞能力も知識階級のみが備へているものでは決してないことを知らなければならぬ。賽会の出発点は迷信にある。しかしそれは同時に知識階級以外の民衆の芸術表現でもある。……このように言えば、我々は賽会とは「迷信であるのと」同時に芸術表現であることにほぼ同意できる。つまり賽会の出発点は迷信だが、迷信から民衆芸術の創作と鑑賞へと昇華したのだと私は深く信じている。

賽会を「民衆の芸術表現」と捉え、そこに積極的な意義を見出そうとしている主張は、徐蘧軒の意見が前提としている民間文化観とほぼ一致している。しかしながら、清末以来みられた手段としての民間文化観や改良の対象としての民間文化観とは一線を画するものの、民間文化そのものの価値を承認したわけではなかった。文明對野蛮という座標軸を固定したまま、民間文化が有する迷信の側面を捨象して、様々な意義を読み替えようとしていたからである。民間文化は、文明化のための改良の対象でありながら、そこから積極的な意義を見出されなければならないという相反性を有しており、文明という尺度によつて郷土を認識しなければならなかった在地知識人が直面した郷土像の両義性と同質の問題であった。

おわりに

本稿では、清末以降における優越規範文化の地域社会への

伝播とそれに対応した自己意識の形成という問題、すなわち、「言説の共通コード」となった文明や人種などの概念やそれらと密接に関係する社会進化論などを在地知識人がどのようにに受容したのか、そして、かかる文明観を受け入れることによって、郷土とはどのようなものであり、どうあるべきであると自己認識するようになったのかといった問題の一端を考察した。その際、江南地方の県や市鎮レベルの在地知識人の言動に着目した。なぜなら、彼らは知識人の中でも最末端に位置するような存在であったものの、地方自治制の実施や近代学校教育の導入など地域社会の様々な課題に直面する中で切実に考えられた世界像は、彼らの自己意識の特質を考察する上で好個の対象であるように思われるからである。

清末民国期の郷鎮志や郷土志の中には新たな文明観に依拠して郷土を叙述したものが現れているが、そこで顯著にみられる世界観は、社会進化論に立脚し、生存競争の結果として生みだされる状態として文明を捉えた梁啓超の影響を強く受けたものであった。しかしながら、思想的な精度という点からみれば、それらにみられる文明観は極めて単純化され、矛盾や歪みが混入したものであり、中には荒唐無稽ともいえる主張が多く見られることも事実である。例えば、『陳行郷土志』の作者が、「人と人、家と家、国と国、種と種」という修身齊家治國平天下の各位相において優勝劣敗が繰り広げられるのが二〇世紀の世界であると捉えたように、儒教思想に立脚しつつ通俗的社会進化論を解釈したハイブリッドな文明観がその端々な事例である。翻ってみれば、このような歪

みは、社会進化論的発想に基づく文明観が末端の在地知識人においても広く共通言語化していたことを示すものでもある。

本稿で検討した在地知識人が、上述のような単純化された文明観に立脚しつつ構想した郷土像が有していた特徴は次の二点である。第一は愛郷と愛国との関係に関する認識である。多くの郷土志やいくつかの郷鎮志では愛郷心の涵養を通じた愛国心の発揚が異口同音に主張された。かかる主張が有する特徴は、日本の郷土教育においてみられた別の側面、すなわち、国家の集権的な方向に逆らう根拠としての郷土の再生という側面が郷土志などの作者からは殆ど言及されることがなかったことと比較するとより鮮明になるように思われる(75)。對外危機に際していかに民族が生存していくかという清末以来の課題は、郷土や国家といった上位秩序に個が寄与することで解決されると発想され、愛郷と愛国とは齟齬なく連続するものであるという前提にたつものであったのである。

第二点は、在地知識人の郷土像が有する二面性についてである。彼らが主張する愛郷の根拠の一つに、郷土の事物が「一草一木」にいたるまで児童が平素親しんでいるものがあり、愛情や愛着があるということ、つまり、郷土とは個人が一体性を有しやすい存在であるという認識があった。同時に、郷土とは、文明から距離をおいてそれを相対化する存在というよりも、文明化を進めていくための最も身近な改良・改造の対象でもあった。このような郷土像の二面性に、文明

化を尺度として郷土を認識しなければならなかった在地知識人が直面した困難が集約されていよう。

注

- (1) 山室信一『思想課題としてのアジア——基軸・連鎖・投企——』岩波書店、二〇〇一年。
- (2) 佐藤慎一『近代中国の知識人と文明』東京大学出版会、一九九六年、九五—一三三頁、同『天演論』以前の進化論——清末知識人の歴史意識をめぐって——『思想』七九二号、一九九〇年。
- (3) 石川禎浩『梁啓超と文明の視座』狭間直樹編『共同研究 梁啓超——西洋近代思想受容と明治日本——』みすず書房、一九九九年、所収、及び、同『近代東アジア「文明圏」の成立とその共同言語——梁啓超における「人種」を中心に——』狭間直樹編『西洋近代文明と中華世界』京都大学出版会、二〇〇一年、所収。中国において受容された「文明」が、社会進化論から導き出された競争を肯定する強権論であり、「私」の上位価値としての「公」乃至団体が強調された点に特徴があると言う指摘は示唆に富む。
- (4) 坂元ひろ子『中国民族主義の神話——人種・身体・ジェンダー——』岩波書店、二〇〇四年。
- (5) 民間社会における出版の問題を考える場合、経典や宝巻など宗教・民間文芸に関する出版物の流通やその作者を視野に入れる必要があるが、それらは識字のあり方をはじめとする多くの課題検討と関連するので、本稿では狭い意味での在地知識人を検討対象とする。この問題については、次の論考でも夙に指摘されている。James Hayes, "Specialists and Written Materials in the Village World", in David Johnson, Andrew J. Nathan, Evelyn S. Rawski, eds., *Popular Culture in Late Imperial China*, Berkeley, California: University of California Press, 1985.
- (6) 清末都市における啓蒙運動の通俗教育の実態については、李孝悌『清末の下層社会啓蒙運動——一九〇一—一九一一——』(中央研究院近代史研究所專刊六七)台北、中央研究院近代史研究所、一九九二年、を参照のこと。
- (7) 佐藤仁史『清末・民国初期上海農農村部における在地有力者と郷土教育——『陳行郷土志』とその背景——』『史学雑誌』第一〇八編一二号、一九九九年、同『清末民初江南の地方エリート』の民俗観——『歌謡』をてがかりに——『史学』第七二巻二号、二〇〇三年、同『近代中国の地方志にみる郷土意識——江南地方を中心に——』『史潮』新五六号、二〇〇四年、同『地方新聞が描く地域社会、描かない地域社会——一九二〇年代、吳江県下の市鎮の新聞と新南社——』『歴史評論』六六三号、二〇〇五年。
- (8) 許衡平『中国近代方志学』南京、江蘇古籍出版社、二〇〇二年、三六一—四六頁。

- (9) 森正夫「清代江南デルタの郷鎮志と地域社会」森正夫『森正夫明清史論集 第三卷——地域社会・研究方法——』汲古書院、二〇〇六年、所収。

- (10) 『錢門塘郷志』序（顧宗侃）。『双林鎮志』初刻引言、においても同様の主張がみられる。

- (11) 『嚶報』五七号（一九一〇年二月二六日）西門郷志徵求文獻、同一六三号（一九一七年四月二一日）、修志危言。このほかにも、『新周荘』二二一（一九三三年九月一六日）修輯鎮志的必要（唐盧鋒）では、清末民初の政治や風俗の変化が歴史上最大であると捉えた上で、先の鎮志を継承し記録を残すことの責任が提起されている。

- (12) 高橋孝助「上海共同租界北辺農村の変遷——宝山県江湾鎮を中心にして——」『宮城教育大学紀要』二三号、一九八八年、同「一九二〇年代はじめに至る上海県法華郷の変遷——消滅しつつある（水郷）——」『宮城教育大学紀要』二五号、一九九〇年、同「一九二〇年代に至る宝山県月浦郷——『発展』から取り残された（水郷）——」『宮城教育大学紀要』二七号、一九九二年。

- (13) 『江湾里志』序（銭淦）。

- (14) 民国『法華郷志』序。租界が周辺農村に与えた影響については、戴鞍鋼「租界と晚清上海農村」『學術月刊』二〇〇二年第五期、でも論じられている。

- (15) 『月浦里志』卷四、礼俗志、風俗。

- (16) 『奉賢郷土志』第三編、第二〇課、結論。

- (17) 森正夫「明末における秩序変動再考」森前掲書所収、岸本美緒「風俗と時代観」『古代文化』四八巻二号、一九九七年。

- (18) 吉澤誠一郎「天津の近代——清末都市における政治文化と社会統合——」名古屋大学出版会、二〇〇二年、補論「風俗の変遷」。

- (19) 民国『法華郷志』卷二、風俗。

- (20) 『江湾里志』卷四、礼俗志、風俗。

- (21) 『月浦里志』卷四、礼俗志、風俗。

- (22) 同右。

- (23) 吉澤前掲書、第一章「体育と革命——辛亥革命時期の尚武理念と治安問題——」。

- (24) 黄葦編『中国地方志詞典』合肥、黄山書社、一九八六年、三五二頁。

- (25) 黄前掲書、三五二頁、及び許前掲書、四五頁。

- (26) 巴兆祥『方志学新論』上海、学林出版社、二〇〇四年、一三五—一六八頁。

- (27) 同右。

- (28) 侯鴻鑒『錫金郷土歴史』、『錫金郷土歴史』（共に、一九〇六年鉛印本、上海圖書館藏）舊廬『常昭郷土歴史教科書』『常昭郷土地理教科書』（共に、一九〇七年鉛印本、上海圖書館藏）。清末では初等小学堂章程や郷土志例目などを受け、初等小学堂一、二年次に、民国初は初等小学校三、四年次に用いるとされたものが

多いが、例外も少なくない。同一省内において統一的に編纂が進められたというよりも、それぞれの作者の自発性に依るものであったことを示すものと思われる。

- (29) 『吳江教育状況——県視学報告——』(一九一三年鉛印本、吳江圖書館藏) 觀察学校評案。

- (30) 陸培亮『川沙郷土志』一九一八年鉛印本、南京圖書館藏。

- (31) 程美宝『由愛郷而愛国——清末広東郷土教材的国家話語——』『歴史研究』二〇〇三年第四期。

- (32) 吉澤誠一郎『愛国主義の創成——ナショナリズムから近代中国をみる——』岩波書店、二〇〇三年、第三章「中国の一体性を追求する——地図と歴史叙述——」。清末における近代地理学の導入の過程については、鄭振環『晚清西方地理学在中国』上海、上海古籍出版社、二〇〇〇年、参照のこと。想像された領土と地理教科書との関係については、黄東蘭『清末・民国期地理教科書の空間表象——領土・疆域・国恥——』『中国研究月報』六八五号、二〇〇五年、がある。

- (33) 秦錫田については拙稿『清末・民国初期における一在地有力者と地方政治——上海県の《郷土史料》に即して——』『東洋学報』第八〇巻二号、一九九八年、参照。

- (34) 侯鴻鑒は無錫の人で、一九〇二年に弘文学院師範科に入学している。帰国後、各種学校を創設し、江蘇や

江西省において視学を務めるなど、教育界において活躍した。

- (35) 『双林鎮志』初刻引言、「章練小志」序、参照。

- (36) 『通州地理教科書』『通州歴史教科書』は、共に一九〇七年鉛印本、上海圖書館藏、である。

- (37) 三種の郷土志の書誌情報は次の通りである。佚名『通州』郷土歴史地理教科書一九〇七年鉛印本、南京圖書館藏、佚名『南通郷土志』民国初年抄本、上海圖書館藏、南通県公署教育科『南通県郷土志』一九三九年鉛印本、南京圖書館藏。

- (38) 『通州地理教科書』編輯大意。

- (39) 『学務大臣奏據編書局監督編成『郷土志』擬通編輯片』『東方雜誌』一九〇五年第九期。

- (40) 『通州地理教科書』第三一課、実学——第三六課、実業六。

- (41) 『通州地理教科書』編輯大意。

- (42) 『通州歴史教科書』第二二課、倭寇始末。

- (43) 坂元前掲書、三五—六八頁。

- (44) 『通州歴史教科書』第二八課、結点。

- (45) 『通州歴史教科書』第三六課、新通州。

- (46) 陳頌平・秦錫田等『陳行郷土志』一九二〇年鉛印本、上海圖書館藏。『陳行郷土志』については、拙稿『清末・民国初期上海県農村部における在地有力者と郷土教育』参照。曾元愷『崇明郷土志略』一九二四年石刻本、上海圖書館藏。

- (47) 『崇明郷土志略』叙(施祖恒誌)。
- (48) 『崇明郷土志略』叙(沈占先識)。
- (49) 『陳行郷土志』孔祥百序。
- (50) 秦錫田『享帚錄』(一九四一年鉛印本、上海圖書館藏) 卷一、新建三林陳行楊思卿立第二國民小学校舎記。
- (51) 拙稿「清末・民国初期上海農農村部における在地有力者と郷土教育」。
- (52) 秦錫圭『見齋文稿』(一九二八年石印本、上海圖書館藏) 滬諺序。
- (53) 陳伯海・袁進編『上海近代文学史』上海、上海人民出版社、一九九三年、一八〇—二〇〇頁。
- (54) 朱小田「社会変革時代の知識世界——対江南民間社会中的南社進行考察——」久保田文次編『國際ワークショップ「二〇世紀中国の構造的変動と辛亥革命」報告集』二〇〇二年、所収。
- (55) 梁啓超「論報館有益於国事」『飲氷室合集』(北京、中華書局、一九八九年) 文集第一冊、所収。
- (56) 前掲『上海近代文学史』一八〇—二〇〇頁。
- (57) 佩忍(陳去病)「論戲劇之有益」『二十世紀大舞台』(張枋・王忍之編『辛亥革命前十年間時論選集』第一集、北京、生活・讀書・新知三聯書店、一九七七年、を参照した)。李孝悌氏は、清末の啓蒙運動との関係において戯曲改良運動の概況を分析している。李前掲書、第五章「戯曲」。
- (58) しかしながら、柳亜子ら南社社員の演劇に対するスタンスはあくまでも「下等社会」に対する啓蒙運動に有用な方法としての側面に着目したものであり、実際の京劇改革における役割や京劇そのものに対する関心は京劇界内部に影響を与える内容ではなかったことも指摘されている。藤野真子「柳亜子と演劇——民国初期上海演劇の一段面——」『季刊中国』No. 五八、一九九九年。
- (59) 吳江蘇黎里鎮鎮志編纂委員會編『黎里鎮志』(南京、江蘇教育出版社、一九九一年) 卷一一、人物。
- (60) 盛澤鎮地方志弁公室編『盛澤鎮志』(南京、江蘇古籍出版社、一九九一年) 第一五卷、人物。毛嘯岑や徐蔚南らは、国民革命時には孫伝芳や国民党右派に追われて、吳江蘇から非難し、のちに柳亜子とともに上海通志館で活動をともした。
- (61) 『盛澤鎮志』第一五卷、人物。
- (62) 例えば、『新黎里』三号(一九二三年五月一日)、同、四号(一九二三年五月一六日)、同、六号(一九二三年八月一日)、に、労働紀念特刊、婚姻問題特刊、婚姻問題特刊(第二号)という特集がそれぞれ四面にわたって組まれている。
- (63) 清末蘇州の市民公社については、朱英『辛亥革命時期新式商人社團研究』北京、中国人民大学出版社、一九九一年、に詳しい。中国の学者は紳商層が担った独自の領域性に公共領域を見出そうとしている。馬敏

- 『官商之間——社会劇變中の紳商——』天津、天津人
民出版社、一九九六年。
- (64) 『新盛澤』六号（一九二三年九月一日）民治与紳
治。
- (65) 『新盛澤』一号（一九二三年七月一六日）今後盛澤
市民必有的覚悟（南）。
- (66) 『新盛澤』七号（一九二三年九月二一日）黎里市民
公社一年來底經過及今後底希望。
- (67) 『盛澤鎮志』第二五卷、人物。吳江県下の市鎮にお
ける平民教育促進会の結成は、中華平民教育促進会の
運動に呼応したものであった。中華平民教育促進会に
ついては、小林善文『中国近代教育の普及と改革に関
する研究』汲古書院、二〇〇二年、参照。
- (68) 『新盛澤』三八号（一九二四年八月二二日）最輕便
的幾種通俗教育事業。『盛澤』四二期（一九二四年五
月二一日）戯劇与風俗（君豪）も、演劇が社会の「中
下級」のものに対する感化力を利用して風俗を改良し
ていくことを主張している。
- (69) 『新盛澤』五八号（一九二五年九月二一日）国民団
結歌（泗州調）、『新盛澤』五六号（一九二五年九月一
日）五更調。
- (70) 『新盛澤』三〇号（一九二四年六月一日）改良通俗
小調夏天衛生歌（仿知心客）。
- (71) 『新盛澤』三七号（一九二四年八月一日）民衆
文学（蓮軒）。かかる主張の背景には革命思想の影
響に加えて、民俗学の登場があげられる。Chang-tai
Huang, *Going to the People: Chinese Intellectuals and Folk
Literature, 1918-1937* (Harvard East Asian Monographs,
121), Cambridge, Harvard University Press, 1985. 趙
世瑜『眼光向下的革命——中国現代民俗学思想史論
（一九一八—一九三七）——』北京、北京師範大学出
版社、一九九九年。
- (72) 『新盛澤』二三号（一九二四年三月一日）双楊会
（汪光祖）。しかし、震澤の絲業や盛澤の綢業の同業団
体は双楊会の開催に積極的であったという。
- (73) 『新盛澤』二七号（一九二四年五月一日）没有一個
有心人了（汪光祖）。
- (74) 『新盛澤』五六号（一九二五年九月一日）我之賽会
観（徐蔚南）。
- (75) 日本の郷土教育については、伊藤純郎『郷土教育運
動の研究』思文閣出版、一九九八年、小国喜弘『民俗
学運動と学校教育——民俗の発見とその国民化——』
東京大学出版会、二〇〇一年、を参照されたい。
- 〔付記〕本稿は科学研究費補助金若手研究B（課題番号
一八七二〇一八九）による研究成果である。